

平成22年 3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19592431  
 研究課題名（和文） 学部教育における文化を反映した看護倫理教育プログラムの開発と受講生の縦断調査  
 研究課題名（英文） Educational program of nursing ethics for nursing student and longitudinal study  
 研究代表者  
 山本 利江（YAMAMOTO TOSHIE）  
 千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
 研究者番号：70160926

研究成果の概要（和文）：看護倫理教育プログラムを受講した看護学生の実習および卒業後の実践について縦断調査した。学生時代には医療現場での問題を倫理的推論にそって整理しており、プログラムの効果が示唆された。しかし卒業後の医療現場では、他職種との価値観の相違や現場の組織文化が影響要因となる葛藤に悩んでいた。以上より、基礎教育課程と卒後教育との連携や、医療現場での専門職種連携教育の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The students who studied the nursing ethics of our educational program, could think the ethical dilemma of clinical problems in clinical settings. After they graduated, they were hard to solve their ethical dilemma in hospital. It shows that our educational program is effectual if we could provide the continuing education and promote the inter-professional education.

## 交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2007年度 | 1,000,000 | 300,000   | 1,300,000 |
| 2008年度 | 700,000   | 210,000   | 910,000   |
| 2009年度 | 1,700,000 | 510,000   | 2,210,000 |
| 年度     |           |           |           |
| 年度     |           |           |           |
| 総計     | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護倫理学、看護基礎教育

## 1. 研究開始当初の背景

医療の高度化とともに臨床倫理についての社会的関心が高まる中、看護倫理教育は1990年代から看護系大学に導入され始め、現在では多くの看護系大学が看護倫理教育に

取り組みはじめた。しかし、看護学生の実習で直面する倫理的ジレンマを調査したところ、その多くが前道徳的段階にとどまっていた。つまり現在の看護倫理教育は学生が臨床でのジレンマ状況を倫理的視点から分析す

る能力を高めるが、実際に臨床現場で生じている倫理的問題の解決をめざす行動をとり、現場の変革をうながす能力を培うまでには至っていないと考えられた。にもかかわらず、医療の高度化や複雑化により、看護職者が医療を受ける当事者の意思が不明な場合や、当事者だけでなく、家族や医療に関係する人々の価値観が複雑に交錯しているのが現状である。このようななか、当事者の人権・生命が擁護されにくい状況に直面し、看護者が倫理的ジレンマに陥り、疲弊している。そこで、高度先進医療など医療体制の激変にもかかわらず、看護の対象である日本人の文化的背景が十分に考慮された、日本の看護の現場に根ざした看護倫理教育プログラムが開発されねばならない。

## 2. 研究の目的

21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点—実践知に基づく看護学の確立と展開」の助成を受け開発した看護倫理教育プログラムを実施する。そして、このプログラムの効果を検証する。

(1) 看護倫理教育プログラムとして行った授業の受講生の看護実習および卒業後の5年間にわたる倫理的推論能力の推移の実態調査を行う。

(2) 東アジア文化圏での看護倫理教育に関する交流をもち、基盤をつくる。

## 3. 研究の方法

(1) 受講生の看護実習および卒業後の5年間にわたる倫理的推論能力の推移の実態調査

平成17・18年度看護学部3年次開講自由科目「看護倫理」受講生のうち研究承諾を得られた学生に、授業終了年度から1年後、および2年後の面接調査を実施する。

①面接調査内容：看護倫理受講後の1年間のうちで、倫理的問題として印象に残った体験の想起と自己の倫理的推論

②看護倫理ポートフォリオに組み入れた倫理的推論の自己評価フォームに準じ、半構造化面接を行う。自己評価フォームの項目は以下のとおりである。

- 看護実践の特性
- 葛藤状況を含んだ看護実践の記述
- 看護実践の記述と分析
  - ・なぜ倫理的に困難だと感じたか
  - ・状況にかかわる患者・家族、ほかの医療従事者の立場や言動
  - ・実際にとられた行動
  - ・行動のよかった点と悪かった点

- 個人の立場と組織の立場の区別
- 相異なる倫理原則の対立を含んだ看護実践の分析

A) 看護者は、どのような葛藤状況の中に置かれているか

- ・倫理上の問題点は何か表現する
- ・自分が直面している倫理的ジレンマは何か、表現する

B) 看護者はその状況をどのようにとらえ、どのように行動しているか

- ・意思決定に関与すると思われる人物とその役割を列挙する
- ・推定できる意思決定をすべて列挙する
- ・それぞれの意思決定における影響を検討する
- ・意思決定者の価値観による相違を比較する

C) その結果、状況はどのように変化したか

D) 他にどのような行動をとることが考えられるか

- ・意思決定の実施ならびにその結果をいろいろ考え、ひとつひとつ検討してゆく
- ・この中で貴方の考える解決策はどれか検討する
- ・選んだ解決策の具体的実施方法を考える
  - \* 誰に、どのように、アプローチしていくか

- 当該看護実践に認められる倫理的価値の対立

当該看護実践における看護者の状況は、どのような倫理的価値の対立を含んでいるか

- 1) \_\_\_\_\_ と \_\_\_\_\_ の対立
- 2) \_\_\_\_\_ と \_\_\_\_\_ の対立
- 3) \_\_\_\_\_ と \_\_\_\_\_ の対立

③各調査対象者の面接データを質的帰納的に分析し、倫理的推論能力と受講時からの推移を明らかにする。

(2) 倫理的推論能力の推移の実態調査報告および看護倫理教育に関する東アジア各国との交流

看護倫理に精通している東アジアの看護系大学に所属する研究者との交流を継続し、情報収集および東アジア看護研究者フォーラムで研究成果を発表して、看護倫理教育に関する討議をもつ。

## 4. 研究成果

(1) 看護倫理教育プログラムの実際は、平成17年度・平成18年度の自由科目「看護倫理

」の授業内容とその実際をまとめ、千葉大学看護学部紀要に報告した。平成19年度からは本プログラムは必修科目となり、80名の学生への授業科目として開始した。

(2) 平成17年度自由科目「看護倫理」受講生7名と、18年度受講生6名のうち研究承諾が得られた学生または卒業生の計11名に対し、受講1～2年後の倫理的推論能力を明らかにするための調査を計画した。面接調査実施前に、改めて調査依頼を行い、承諾が得られた計7名の面接を行った。

(3) 対象者全員に、看護倫理受講後の看護学実習で、倫理的葛藤が体験されていた。対象者は、それを倫理的推論にそって整理しており、プログラムの効果が示唆された。

#### (4) 対象者への面接調査

対象者は全員が看護職として就職した。この就職1年目、2年目に研究参加の得られた対象者に面接調査を行った。対象者が語る事例ごとに概要と倫理的葛藤を抽出した。以下に、その一例を示す。

#### ①<Aさんの語りの一部>

(1) 内は面接調査者のことばである。  
「倫理的問題と言っているのかどうか分からないですけど、自分の病棟は〇〇病棟で、〇〇科と〇〇科と〇〇科の混合病棟なんですよ。(大変ですね、たくさんいろんな科が入って) 本当に大変なんですよ。〇〇科が、いろんな科から回ってきて、多分、倫理的問題は結構いろいろ、いっぱいあると思うんだけど、今まで経験した中で、でもなんかこう、どんどん毎日流れてきてしまうので、どんどん忘れていってしまう。今からお話するのがほんとに倫理的問題かはわかりませんが、患者さんは〇〇歳の女性の患者さんで、起立性低血圧で入ってきた人で、もともと別の病棟にいて、そっちの治療やって、もしかすると退院できるとなっていたけど、低血圧がひどくって、〇〇科に入院してきたんですけども。意識レベルとかはクリアで理解力もよい方なんですけども、やっぱり低血圧があるってということで、ドクターの指示で、立ち上がる前とか、動き出す前には必ず血圧測定するようにということと、トイレに行く時はその血圧の状況を見て、床上排泄か、ポータブルか、場合によっては車いすでトイレかということだったんですよ。で結構、それで入院期間が長くなって、やっぱりトイレ行きたんびにナースを呼んで、毎回血圧測って、終わってもまた血圧測ってというのに、結構ストレスたまってる。(誰が?患者さんが?)そ

の患者さんが。でもやっぱり〇階がすごい忙しい病棟なんで、ナースコールがあってもすぐにはいけなくて、それで余計ナースコール押すのが申し訳ないってなってる。ほんとにストレスたまってる、もう泣きながら話すような感じで。(語りが続く)」

#### ②<Aさんが臨床現場で体験した倫理的ジレンマに関する概要>

内科3診療科・部の混合病棟で受け持ちを始めた頃のことである。腫瘍の精査目的で入院してきた高齢女性が、退院直前に起立性低血圧を頻発し、姿勢保持できないくらい脱力するため、医師から血圧値で排泄方法を選択するよう指示された。患者は排泄介助への遠慮や、原因がわからず薬物投与も効果がなく、徒に入院が長期化しことが相俟って、ストレスが高まっていた。患者にはそもそもの腫瘍の治療が予定されており、一度退院しておきたいと希望していた。また、以前にも同様のことが起きており、患者なりに注意して行動する方法も知っている。それなのに、いつまでたっても医師の指示は変わらない。

#### ③<Aさんの語りからとらえられた倫理的ジレンマ>

「患者の気持ちと医師に指示された生活(排泄方法)の規制」、「退院後の生活に向けた行動拡大と医師に指示された生活(排泄方法)の規制」、「看護者の判断と医師の指示」

Aさんの語りからはこれらの倫理的ジレンマが抽出されたが、その一方で、語りが進むうちに、先輩ナースに相談したり、カンファレンスがもたれたり、研修医が患者の歩行練習に参加していることが明らかになり、面接のなかでジレンマの様相の変化が認められた。

#### (5) 調査結果の総括

対象者への面接調査および分析を、同様に行った。調査結果の総括は次のとおりである。

対象者が倫理的葛藤としてはっきり自覚していないものもあった。しかし、対象者から語られた内容を分析すると、語りのはじめにあった倫理的葛藤が、語っているうちに焦点が動いていき、自らが倫理的推論に従って考えていこうとする様子が認められた。これは、倫理的感受性は、今回の調査の様な場で刺激されると発揮されること、しかし通常の現場では流されてしまい、倫理的推論が働いていないという発達段階を示した。また、この倫理的葛藤の内容には、他職種との価値観の相違や現場の組織文化が影響要因として考えられるものが多かった。調査終了時に、対象者からは、本調査をきっかけに葛藤が整理されたとの感想があった。

以上より、本研究では、学生の倫理的推論能力の縦断的变化の実態のみならず、基礎教育課程と卒後教育との連携や、医療現場に携わる多職種の連携教育の必要性を示唆する資料が得られた。

(6) 香港理工大学との交流を毎年1回持ち、情報交換した。

(7) 香港理工大学での活用を意図し、看護倫理プログラムの資料として作成したワークノートを英訳した。

(8) 米国における看護倫理担当者との交流を行った。看護倫理プログラムのクリティークを受け、本プログラムにおける倫理的感受性に着目して、受講生の変化が表れていることが、看護倫理教育上意義があるとの評価を受けた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①酒井郁子、石井伊都子、宮崎美砂子、山本利江、井出成美、田邊政裕、千葉大学医療系学部基礎教育課程における専門職連携教育の取り組み-看護学部、薬学部、医学部必修教育プログラムの開発と実施-、千葉大学看護学部紀要、査読有、Vol. 30、2008、pp. 49-55

②山本利江、当事者参加を取り入れた看護過程展開の演習の企画・実施報告、千葉大学看護学部紀要、査読有、Vol. 29、2007、pp. 43-48

③宮崎美砂子、山本利江、学士課程看護基礎教育のカリキュラム改革-3年に及ぶとりくみ経過とその成果・課題、千葉大学看護学部紀要、査読有、Vol. 29、2007、pp. 49-55

④森恵美、手島恵、酒井郁子、荻野雅、吉田千文、和住淑子、山本利江、千葉大学看護学部における日本文化を反映した看護倫理教育の先駆的試み、千葉大学看護学部紀要、査読有、Vol. 29、2007、pp. 61-66

[学会発表] (計4件)

①山本利江、森恵美、手島恵、酒井郁子、荻野雅、吉田千文、和住淑子、倫理教育プログラム受講生が卒業後に臨床現場で体験する倫理的ジレンマと倫理的感受性に関する縦断調査-卒業後1年目に焦点を当てて-、文化看護学会第1回学術集会、2009年2月14日、千葉大学

②石井伊都子、宮崎美砂子、酒井郁子、山本利江、井出成美、田邊政裕、朝比奈真由美、亥鼻 IPEにおける学内連携と学外連携の現状、日本保健医療福祉連携教育学会第1回学術集会、2008年11月29・30日、埼玉県立大学

③和住淑子、齊藤しのぶ、山本利江、社会変革期における F. Nightingale の業績を評価するための分析枠組みについて、2008年10月12日、学士会館

Miyazaki M., Sakai I., Ide N., Iino R., Tanabe M., Ishii I., Tagawa M., Yamamoto T., Asahina M., Nakamura T., Iida K.

The development of learning outcome evaluation items for interprofessional education in Japan、Association for Medical Education in Europe 2008 Conference、August 30・September 3, 2008、Tay Park House in Prague, Czech Republic

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 利江 (YAMAMOTO TOSHIE)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：70160926

##### (2) 研究分担者

森 恵美 (MORI EMI)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：10230062

手島 恵 (TESHIMA MEGUMI)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：50197779

酒井 郁子 (SAKAI IKUKO)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：10197767

和住 淑子 (WAZUMI YOSHIKO)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授  
研究者番号：80282458

荻野 雅 (OGINO MASA)

国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授  
研究者番号：60257269

吉田 千文 (YOSHIDA CHIFUMI)

聖路加看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号：80258988